S. Ashina

前期：キリスト教と政治思想

オリエンテーション

１．イデオロギーとユートピア

１－１：リクール１

１－２：マルクスとマルクス主義

１－３：黙示的終末論の系譜

１－４：ティリッヒ１

１－５：ティリッヒ２　6/5

１－６：リクール２　6/12

１－７：知恵思想の視点から　6/19

１－８：パウロとローマ帝国　6/26

２．キリスト教社会主義

２－１：キリスト教社会主義の―イギリス・アメリカ・日本―　7/3

２－２：宗教社会主義―ティリッヒ―　7/10

２－３：賀川豊彦のキリスト教社会主義　7/17

２－４：解放の神学　7/24

Exkurs

キリスト教と仏教１

キリスト教と仏教２

＜前回＞黙示的終末論の系譜

（１）黙示的終末論、その発端

１．ユダヤ思想から新約へ、終末論の類型：預言者的、黙示的　→　意味の拡張

２．イエス時代の通常の「神の国」理解：預言者的終末論、黙示的終末論
　イエス運動における「神の国」の意味の転換＝隠喩化（言語化・テキスト化）

３．終末：善悪の最終的決着の時・罪の問題の最終的解決＝歴史（創造から終末）の完成
　　→　神との完全な関係の実現・本来的な人間性、正義の実現

４．宇宙的ヴィジョン（ドラマ化）→　罪と悪に対する勝利、ハルマゲドン
　　バビロン捕囚以降の状況・ゾロアスター教の存在
　　1) ヘレニズム的な文化環境への適応
　　2) 民族宗教の再建　　→ 普遍化：預言者、知恵
　黙示文学：ダニエル書、エズラ書、ヨハネ黙示録（アポカリプシス）

５．迫害・抵抗文学 → 象徴、暗号
　　獣、「大バビロン、みだらな女たちや、地上の忌まわしい者たちの母」

７．黙示文学の影響：千年王国論（終末時のキリストの千年支配、黙示録 20:2-6 ）

８．現代的問題連関で：エコロジー神学にとっての「神の国」・終末論

（２）古代から中世へ

１．制度化された宗教への急速な傾斜：教会組織の階層化――100年頃には、アンティオキアの司教イグナチィウスは教会概念に、司教・司祭・助祭の三層の位階制を結びつけている。

２．制度化への大きな反動：最初の大規模な動きとしてのモンタノス運動。
３．霊的自由を求めて。霊的体験、解放・平等、女性
モンタノスとその信奉者（マクシミラとプリスキラという預言の賜物・カリスマを受けた二人の女性を含む）によって開始され、後にテルトゥリアヌスも加わったこの運動のキリスト教史における意義。
４．霊の経験（新しい預言）と終末意識との結合。
社会的構想力と民衆運動・ユートピア運動
このメカニズムは、キリスト教を超えて作用している。解明の必要。
６．ヨハネ黙示録の内容を来るべき出来事の文字通りの予言とみなすことに同意する教父たち：ユスティノス、テオフィロス、エイレナイオスなど。
８．オリゲネスとエウセビウス：ヨハネ黙示録のアレゴリカルな解釈。
人間における身体、魂、霊の区別→聖書テキストの意味における同様の区別。
歴史的あるいは字義通りの意味、霊的意味
９．キリストの千年間の統治や天のエルサレムの降臨、第二の死などの解釈。
『原理論』第一巻第六章の「終末について」。
ヨハネ黙示録的な永遠の命と永遠の裁きの二分法　→　万物復帰説
10．エウセビウス：ローマ帝国によるキリスト教の国教化に対応した「親ローマ帝国的歴史神学」。

（３）フィオーレのヨアキムと歴史神学

１．フィオーレのヨアキム（Joachim of Fiore）　1130 頃-1202
３．カタリ派やヴァルド派といった異端的な民衆運動はこうした社会背景から中世世界の脅威として登場するのである。こうした民衆の新しい宗教性の開花に対して、教会は異端審問制度を確立するともに、新しいタイプの修道院運動、つまり托鉢修道会（フランシスコ会、ドミニコ会）を公認することによって対処しようとした。
４．ヨアキムの聖書解釈学：聖書テキストの多義性＝四重の意味
字義的意味、寓意的意味、道徳的意味、神秘的意義
５．聖書解釈から歴史理論
三位一体論：内在的　→　経綸的・歴史的
・神が歴史を支配する　　・聖書がそれを語っている
６．ヨアキムの歴史解釈
・父の時代／子の時代／聖霊の時代
・三つの時代の相互内在　→　歴史の弁証法
・未来としての聖霊の時代
７．ヨアキムは切迫した終末（一二〇〇年という年の接近）を強烈に意識しつつ、来るべき歴史の新段階、新しい完全なる社会というユートピアの幻の中で生きたのであったが、それは、アウグスティヌスの場合とはまったく異なった終末論、まさに黙示的終末論というべきものの典型であると同時に、西欧における歴史の弁証法的ダイナミズムを鋭くとらえた歴史哲学の起点を成しているのである。
８．黙示的終末論の再興、千年王国論のインパクト

5/29/2012
S. Ashina

１―４：ティリッヒ１

＜問題と方法＞

・ティリッヒにしたがって、キリスト教終末論との関連で、「イデオロギーとユートピア」を論じる。

・ティリッヒが行う、アウグスティヌス論とヨアキム論とを参照する。

・これはティリッヒによるアウグスティヌスとヨアキムの解釈という問いであり、アウグスティヌスとヨアキムそのものには必要最小限しか踏み込まない。

（1）アウグスティヌスの「神の国」論と歴史神学

１．黙示的終末論からの離脱

　二つの立場、つまり千年王国論とオリゲネス主義との対決

２．初期アウグスティヌス

「聖書に、「主にあっては、一日は千年のようであり、千年は一日のようである」と記されているので、この日の六日間としての六千年が満了したのち、最後の千年間がいわば安息日であるかのように第七日目がそれにつづくのであって、明らかにこの安息日を祝うために聖徒たちがよみがえるというわけである。この見解は、その安息日において、主が現前しておられることによって聖徒たちに何らかのたのしみがそこにあるのなら、とにかく認められるであろう。じっさい、わたしたちも一時期、この見解をもっていたのであった。……ところで、霊的な人びとはこのような見解を信じる者を、ギリシア語で「キリアスタ」と呼んでいる。わたしたちはそれと同じ意味をもつことばに移して、「至福千年論者」と呼ぶことができよう。」（『神の国（五）』）、140-141）

３．「アウグスティヌスの初期の作品には、もっと古い千年王国の観念の影響が窺える」、「黙示文学的な期待の残響が見られる。」（マーカス、41）

４．『神の国』の時期（413-426年、59-72歳）：

・ドナティスト論争（50 歳代）：迫害によって教会を裏切った聖職者のサクラメントは有効か（サクラメントの有効性をめぐる論争、事効論と人効論）。教会の聖性（聖なる教会）とは何か。厳格主義者としてのドナティスト。再洗礼を主張。

　一連のカルタゴでの教会会議。、第 9 回会議（404 年 6 月）で、アフリカのカトリック教会は、問題解決のために国家権力の介入を要請。

　『教会の一致』（405年、51歳）

　　ヒッポの司教（391 年、37 歳。テオドシウス帝がキリスト教を国教とする）

　　西ゴート族（アラリック）のローマ侵入・略奪（410 年、56 歳）

　　60 歳代：ペラギウス論争

・千年王国論を明確に否定するに至る。ヨハネ黙示録のテキストをオリゲネスと同様に比喩的に解釈。

「千年」:「ヨハネは、この世の年数の全体の代りに『千年』を用いたのである。それは、完全な数によって時の充満があらわされるためである。……『千の代に』が『よろず代に』と解されてもよいであろう。」（142）

５．千年王国の現在性

「現在でさえ、教会はキリストの王国なのであり、天の王国なのである。それゆえにま

た、キリストの聖徒たちは、たしかにかのときに支配するのとはちがった仕方によるのではあるが、現在もかれらはキリストと共に支配しているのである。とはいえ、毒麦は、キリストと共に支配しているわけではないけれども、教会のなかで小麦と共に成長しているのである。」(156-157)

６．キリストと聖徒たちによる「千年間の支配」はすでに教会の中に現前している。「教会は現在においてもキリストの御国」(158)

７．「第七の時代は現在の第六の時代の中にとりこまれて併存し、終末に向かいつつある今、キリストが教会の中に現存することにより悪魔を縛ってその行動を拘束し、洗礼と秘蹟の恵みによって聖徒の第一の蘇りがおこりつつあるというべきであろう。」(坂口、20)

８．教会論：善悪の混合体としての教会

教会は聖なるものであるが、現実の教会は完全な聖性を有していない。悪や罪を内にもっている。教会の聖性は構成メンバーの聖性ではなく、サクラメントと聖霊による。

９．歴史の規定する二つの原理、神の国(civitas dei)と地の国(civitas terrena)

・歴史的実在は、この二つの原理の混合(corpus mixtum)

・神の国としての完成はただ神のわざによって実現する。「神が人類を教育して、その終極目的に達せしめる過程が歴史である。」(金子晴勇『アウグスティヌスの人間学』創文社、1982年、331 頁)

10.「今ここでエクレシアは「聖」であっても、常に混合体であるべきである。その中には「世界」においてと同様に、二つの国が解き難く絡み合っている。この観点から見ると「教会」と「世界」とは区別はない」、「王国は神の創造の目的の最終的な完成である。教会はそうではない。教会は仮の制度であり、世界の中にあるその固有の存在はそれ自体暫定的である。教会と世界の二重性そのものが終末論的王国の中で止揚されるであろう。」(マーカス、191)

「ローマ帝国におけるコンスタンティヌス、もっと正確にはテオドシウスによるキリスト教の体制化の拒否、および『キリスト教帝国』の背後にある神学の拒否」(179)

11.「アウグスティヌスの終末論は、オリゲネス主義的な歴史循環論の残滓を払拭した点で、古代的なものから決別した。しかしそれは、物質主義的なものより、霊的なものにいたるまで一切の千年王国説を否定した。だがそのために、千年王国説に内蔵されていた未来主義的志向をも抹殺してしまった。」(坂口、27)

12. Tillich

The hierarchy, those who have the consecrations, mediates between the two. In them Christ rules the church and Christ is present. Thus, the Catholic Church could use Augustine in both ways. It could identify the kingdom of God with the church to such a degree that the church became absolutized; this was the one development which actually happened. On the other hand, the difference could be made very clear, and this is what the sectarian movements and the Protestants did. There is a dialectical relationship between the kingdom of God and the church in Augustine. It was ambiguous enough to be useful for different points of view. But one thing was clear for him: there is no thousand-year stage in world history, no third age. Chiliasm or millennialism was denied by him. Christ rules the church in this present time; there are the

thousand years. There is no stage of history beyond the one in which we are living. The kingdom of God rules through the hierarchy, and the chiliasts are wrong. We should not look beyond the present period in which the kingdom of God is present in terms of history.（121）

In this light the struggle becomes visible between the revolutionary attempts of the sectarian movements and the conservatism of Augustine's philosophy of history.（122）

（２）ヨアキムの歴史哲学の意味

13．Tillich

In Joachim of Floris we have an interpretation of history which became extremely influential upon the Middle Ages as well as upon modern thought. Joachim was an abbot of a monastery in Calabria in southern Italy. He wrote a number of books in which he developed a philosophy of history which became an alternative to the Augustinian interpretation of history and formed the background to most of the revolutionary movements in the Middle Ages and in modern times. Augustine's interpretation of history was the basis for the most conservative movements during the same time. I want to confront the Joachimist interpretation of history with the Augustinian.

The Augustinian view places the reign of Christ, the thousand-year period, in the present time and identifies it with the control of this period by the hierarchy and its divine graces. The sacramental power of the hierarchy makes it the immediate medium of Christ, so that the thousand-year period, the monarchy of Christ, is the monarchy of the church. Since this is the last period, according to Daniel, there is no future any more; the thousand years are here and we live in them. Criticism can only be directed to the church so far as it is a mixed body, not to its foundation, which is final. In this way Augustine removed the threat of millenarianism --- the doctrine of the thousand years --- which holds that the millennium is still to come in the future, and in the light of which the church and its hierarchy could be criticized.

Joachim renewed the idea of the thousand years of Christ which is still lie in the future.（175-176）

This means that something is still ahead. The perfect society, the monastic society, will still come, and when measured by it not only the Old Testament society but also the New Testament society, the church, must be criticized.

Another idea is that truth is not absolute, but is valid for its time --- *bonum et necessarium in suo tempore* --- the good and necessary according to its time. This is dynamic concept of truth, the idea that truth changes in history according to the situation. The early church had to apply this principle always to the Old Testament. The truth of Old Testament is different from that of New Testament, and yet it also is the divinely inspired Word of God. To account for this theologians spoke about dispensations or covenants. The idea of the *kairos* was used, which means that as the time is different, so the truth is different. This idea was placed against the absolutism of the Catholic Church, which identified its own being with the last period of history, that is, with the ultimate truth. For Joachim there is a higher truth than that of the church, namely, the truth of the Spirit. From this it follows that the church is relative.（178）

14．二つの歴史哲学　→　歴史的現実における弁証法的相互連関（真理の歴史的動態、真

理は時間・カイロスに規定される。隠れつつ現れ、現れつつ隠れる）

Paul Tillich, *Kairos und Logos*, 1926.

この弁証法が解体するとき、そこにイデオロギーとユートピアの二分法が現れる。

＜参考文献＞

１．Paul Tillich, *A History of Christian Thought. From Its Judaic and Hellenistic Origins to Existentialism*（ed. by Carl E. Braaten）, Simon and Schuster, 1967/68.

ティリッヒ『キリスト教思想史Ｉ』（ティリッヒ著作集　別巻三）白水社。

２．アウグスティヌス『神の国　（一）～(五)』服部英次郎訳、岩波文庫。

３．金子晴勇編『アウグスティヌスを学ぶ人のために』世界思想社。

４．Ｒ・Ａ・マーカス『アウグスティヌス神学における歴史と社会』教文館。

５．芦名定道、小原克博『キリスト教と現代――終末思想の歴史的展開』世界思想社。

６．バーナード・マッギン『アンチキリスト――悪に見せられた人類の二千年史』河出書房新社。